

## 札幌市立真駒内公園小学校の取組【雪に関する教育課程】

### 1. 研究のねらい

本校では、毎年3年生が校区内の町内会行事「ゆきあかりキャンドルロード」に参加している。経緯は、開校時、雪に関する活動をどのように教育課程に位置付けるかを模索していた。また、町内会では高齢化が進んできて、長年行われてきた「ゆきあかりキャンドルロード」行事への参加者が減ってきており、何とか活性化したいという願いがあった。さらに本校は開校以来、他人を思いやる気持ち、自分を大切にする心などの「人権教育」に取り組んできた。本校の「雪」の活動を通して、地域の方と触れ合い、地域への愛着をもち、人や地域を大切にする心を育てていきたいという願いと町内会の地域の中で子どもを育て、子どもと交流することで、町内会行事の活性化を図りたいという思いが見事に合致して、この活動が始まり、その後も継続して活動を進めている。

### 2. 取組内容

#### (1) 「ゆきあかりキャンドルロード」の準備をしよう

##### 雪像づくり

本番に向けて2度会場に出向き、子どもが雪像づくりを行った。最初に地域の方から場所や注意事項などを聞いた後、グループ毎に雪像づくりが始まった。事前につくるものを決めていたため、子どもはグループで協力して雪を積み、削り始め、雪像づくりを行った。今年は、昨年と違って気温が低く、雪が固まりづらく、水を使って雪を固めていた。地域の方もお手伝いしてくださったり、温かく見守ってくださったりしていた。

2度目も大変寒く、雪が固まりにくい条件であったが、子どもは水を使ってツルツルにしたり、色を付けたりして、カラフルな雪像を作っていた。最後にみんなで他のグループの雪像を見て交流を深めた。



#### (2) 「ゆきあかりキャンドルロード」に参加しよう

##### ①スノーキャンドルづくり

土曜日の午前中の2時間を使って、スノーキャンドルづくりを行った。土曜日であったが、多くの子どもが参加してくれた。初めに町内会の方から作り方を教えていただき、グループごとに作り始めた。最初は、崩れてしまったり、穴が小さすぎたりして苦労をしていたが、水を使って、雪



を固めて作り続けていくうちに、コツを覚え、上達してきた。子どもが作っている横で、地域の方もスノーキャンドルづくりを行っていた。今年は気温が低く、水を使うため、防水手袋をしていても子どもの手が冷たくなり、早めに終了することにした。帰りに多くのスノーキャンドルが並んでいるのを見て、点灯後のスノーキャンドルへの興味が高まっていた。

## ②点灯後のキャンドルロード



夕方、16時30分からスノーキャンドルに点灯を始めた。子どもが、キャンドルを1本ずつ入れて、火をつけていった。今年から、子どもが「冬」「雪」「スノーキャンドル」などについての五七五の川柳を作り、スノーキャンドルの横に置いた。子どもは、早速自分の川柳を探し、保護者が記念写真を撮っていた。点灯時は、まだ明るかったが、だんだん暗くなってきて、キャンドルの灯りがゆらめく

ととても幻想的な雰囲気を感じることができた。多くの子ども、保護者だけではなく、地域の方もたくさん訪れてくれた。



## 3. 成果と課題

### (1) 成果

子どもは地域の人と一緒に活動することで、人と触れ合うよさを実感し、改めて地域の大切さを感じることができた。子どもがつくった雪像、スノーキャンドルに地域の人が「すごい」「きれい」と喜んでくれたことも実感できた。さらに、3年生の子どもは学校の代表として行事に参加したという意識を強くもっており、地域に貢献したという思いも強く感じている。地域の方からも、多くの子どもの参加に対して、感謝の言葉があり、自分たちの活動に自信をもち、自尊感情を高めることができた。さらに、今年は国語「冬の楽しみ」の学習時間に「川柳」を作ることで、「ゆきあかりキャンドルロード」にむけての意識付けを図ることができた。その結果、土曜日にも関わらず、3年生児童の参加者数が昨年より増えたと思われる。

このように、学校のねらいである「人権教育」と「雪」の活動を組み合わせて、多くの地域の方と交流できたことが大きな成果である。昨年この行事に参加した現4年生や他学年児童も多く参加してくれた。今後も地域行事が脈々と続いていくことを願っている地域の方の気持ちも感じることができた。

### (2) 課題

雪像をつくる公園が、学校から少し離れているため、安全面で配慮をしたり道具を運搬したりする人員の確保が必要である。また、町内会行事のため、土曜日ということで全児童がスノーキャンドルづくりに参加できない。点灯が夜のため、保護者同伴としているが保護者の用事によって参加できない児童がいて、夜のスノーキャンドルを見られないのは、残念であった。また、外での活動のために、天候に左右されてしまうことが一番の気掛かりである。